

Title	トマス・ハーディと歴史学 : 方法論的事例研究
Sub Title	Thomas Hardy and history : a methodological case-study
Author	F., Reid 永島, 剛
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1993
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.86, No.3 (1993. 10) ,p.170(8)- 196(34)
JaLC DOI	10.14991/001.19931001-0008
Abstract	
Notes	特集 : 社会史と文学
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19931001-0008">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19931001-0008</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# トマス・ハーディと歴史学

——方法論的事例研究——

フレッド・リード  
訳 永 島 剛

トマス・ハーディの小説に登場する「ウェセックス」は、長らく歴史家と文芸批評家の間で論争的となってきた境界<sup>ボーグー・カントリー</sup>の地である。ダグラス・ブラウン<sup>(1)</sup>のような批評家は、19世紀後半に英國<sup>イングランド</sup>を襲った農業不況の信頼できる目撃者としてハーディを捉えたのに対し、何人かの歴史家は全国規模の農業不況の事実を否定してきた。また、ハーディを18世紀末から19世紀初頭にかけての農村労働者階級の態度についての信頼できる観察者としてみなす歴史家がいる一方で、他の歴史家は農村の社会的抗議の史料<sup>(2)</sup>は異なるものであるとする。社会主義的人間主義<sup>(3)</sup>の批評家たちは、ハーディの小説のなかに階級闘争やジェンダー闘争との関連のなかで疎外を表現する19世紀後半の状況についての総合的解釈を見いだし、また、人間の真の価値を潜在的な成果として確認した。これらの批評家たちは、ハーディの小説は哲学的な悲観主義の反映であるとする、馴染みのあるハーディ批評とは考えを異にしている。他の者は、彼を人類の普遍的な苦痛を嘆く哀れみの中立的詩人として捉えた。

批評の伝統は多岐にわたっており、小説と歴史研究との関係をめぐる事例研究にとって絶好の機会を与えていた。本稿では、まず第一に、英國農村<sup>ルーラル・ヒストリー</sup>史の解釈者としての特権的地位をハーディに与えることを留保する一方で、田舎の慣習や行動様式を研究する際の史料として、ハーディの小説を使用することを擁護したい。

第二には、ピーター・ラスレット<sup>(7)</sup>が先駆となり、最近K. D. M. スネル<sup>(8)</sup>がハーディに適用したネオ実証主義的文学社会学に対して若干の批判をしたい。彼らのアプローチは経済史から家族史へと焦点を移行してきたものだが、ハーディの悲観主義とノスタルジーとの関連でその小説の「正確な」

注 (1) D.Brown, *Thomas Hardy* (1954), p.2.

(2) W.Fletcher, "The Great Depression in English Agriculture, 1873-96". *Ec.H.R.*, 2nd ser., XIII, 1960-61, pp.417-32.

(3) E.P.Thompson, "The Moral Economy of the English Crowd in the Eighteenth Century", *Past and Present*, 50, 1971, pp.76-136.

(4) J.Bohstedt, *Riots and Community Politics in England and Wales, 1790-1810* (1983).

(5) R.Williams, *The English Novel from Dickens to Lawrence* (1970). Cf. M.Williams, *Thomas Hardy and Rural England* (1972).

(6) I. Gregor, *The Great Web : the Form of Hardy's Major Fiction* (1974).

読解というものを決めこみ、こんどは悲観主義とノスタルジーをヴィクトリア時代英國の人口学的変化や、その変化の結婚や職業類型への効果といった文脈において説明しようとするものである。

小説と歴史の変化との関係は、もっと複雑なものであると私は考える。小説のテクストは「分散化」されたものであろうし、それ故歴史についての一つの考え方以上のものを物語ることができるかもしれない。このような期待をもって、我々はハーディの小説の文体が、歴史の悲観的解釈を問い合わせ直す方法を注意深く検討してみなければならない。これはポスト・ソシュール的な批評の見解であり、私は歴史と小説の関係をめぐる議論に、それが重要な洞察を与えてきたことに注目したいと思う。しかしポスト・ソシュール的批評は一貫したものではなく、その実施者はハーディの評論の分野でも異なった結論を導いている。ある者は、「古典的なリアリズム」<sup>(10)</sup>と、さらには人間性の状態を普遍的な悲劇としてみる超悲観主義に、ハーディを重ね合わせた。また他の者は、ハーディの「多義的な」テクストから、革命的なハーディを「創作する」ことを模索してきた。<sup>(11)</sup>ジョン・グードはもう少し微妙なアプローチをとっている。彼は、ハーディを階級とジェンダー諸関係の弁証法に読者を直面させるような、叙述の新しい方法の発達を追及する革新的な作家として提示する。ハーディは、読者をまずジェンダーや生産に関するイデオロギー的な観点に誘いこみ、それからそのような思考方法の諸結果を示すことによって、彼らに衝撃を与える。グードの説明では、ハーディは全く独自に、20世紀のネオ・マルクス主義の哲学を先取りしているようにみえるという。ただ、ハーディが自分の小説をどのように19世紀の歴史哲学の議論に関連づけているかを示す試みは、ほとんどなされていない。

それ故本稿の最終的な目的は、ハーディを、こうした推論的な文脈、とくに近代史の導きの糸としてヴィーコに関する自由・英國国教派の議論に、引き戻してみることである。私は、ハーディの後期の小説が、ヴィーコの『新しい学』<sup>(12)</sup>の世俗化された見解によって、歴史の悲観的哲学に対抗す

注 (7) P.Laslett, "The Wrong Way through the Telescope : a Note on Literary Evidence in Sociology and Historical Sociology", *Brit. J. of Sociology*, xvii, 1976, pp.319-42.

(8) K.D.M.Snell, *Annals of the Labouring Poor : Social Change in Agrarian England, 1660-1900* (Cambridge, 1985), esp. ch. VIII. pp.374-410.

(9) C.Belsey, *Critical Practice* (1980), pp.37-47. にみられる文学理論や批評活動における様々な「ポスト・モダン」的要素を表すのに便利な語として、ここでは「ポスト・ソシュール的批評」ということにしたい。

(10) *Ibid.*, p.68.

(11) P.Widdowson, *Hardy in History : a Study in Literary Sociology* (1989).

(12) J.Goode, *Thomas Hardy : the Offensive Truth* (Oxford, 1988).

(13) *The New Science of Giambattista Vico, translated from the third edition* (1744) by T.B. Bergin and M.H.Fisch (revd. and abridged edn., N.Y., 1961) [清水純一・米山喜晨訳『新しい学』中央公論社 1975年]

*Cf. L.Pompa, Vico's Selected Writings* (Cambridge, 1982) : L.Pompa. *Vico : a Study of the New Science* (Cambridge, 2nd edn., 1990) ; I.Berlin, *Vico and Herder* (1976). [小池鈴訳『ヴィーコとヘルダー』みすず書房 1981年]

るものとみなされるべきである、ということを論じてみたい。その見解は、ただちに自由・国教派の歴史の捉え方を世俗化し、神学的な重要性を『新しい学』から一掃したものである。このように一掃して、この見解は、階級とジェンダー闘争がはびこる発展した社会の常としての頽廃を前面にだす歴史哲学を、ハーディに提供することができたのである。同時に、新生活への螺旋的運動、即ちハーディが完全に人間の営みのひとつとして表現するような過程として歴史を捉える視点は、ショーペンハウエルとダーウィンの合体に由来する歴史の悲観的解釈に対抗することにもなっている。ただ、このようにハーディの小説を特定の推論的文脈に引き戻すことによって、私は歴史の唯一の「正しい」説明として、「社会主義的人間主義」に特権的地位を与えるつもりはない。私の目的は、ある種のポスト・ソシュール主義者やマルクス主義構造主義者の批評が、ハーディの小説の「人間主義的」内容を否定すること、即ち革命的実践にハーディを引きいれようとするためにこうした一つのイデオロギーから彼をひき離すことにおいて、行き過ぎていることを示すという、もっと限定的なものである。

私がここでいう「人間主義」とは、文化のシステムとして人間社会を定義し、その総体の変化を、人間の合目的的な行動（もちろん意図的でない）から生み出されたものとみるような、歴史哲学であるということを、ここでつけ加えておかなければならない。

## 1. 反映としての「ウェセックス」

1954年にハーディの小説に関するダグラス・ブラウンの研究がだされて以来、英國農村史の解釈者として、ハーディに大きな期待をよせる批評家は後を絶たない。しかし批評家や歴史家の次にみるような限られた検討からも、ハーディが自分の生誕地の地方の社会変化の観察に付与した意味については、広範な不合意が存在することがわかるだろう。

ブラウンにとって、ハーディの小説は「農村の悲劇」、即ち19世紀の第四・四半期に英國農業を襲った、想像される破滅的不況の証言である。<sup>(14)</sup> 1846年にサー・ロバート・ピールによって実施された穀物法撤廃の諸結果に、英國が初めて気づくことになったのはこの時期であった。いまや鉄道と大西洋航路をつうじて、アメリカの大平原から自由に穀物輸入が行われていたし、同様にオーストラリアの羊毛、ニュージーランドの羊肉、アルゼンチンの牛肉が英國農場主の国内市場を侵食していた。英國南西部一ほぼウェセックスに相当する地方一でも、牛・羊・穀物の混合大農場は、困難な局面に陥った。農業労働者は土地から離れることを余儀なくされ、隔離されていた農村共同社会も都市の金錢や流儀に侵食されるようになった。

こうしてブラウンにとって特徴的なハーディは、『遙か群衆をはなれて』におけるトロイ軍曹、

注 (14) Brown, *Thomas Hardy* (corrected edn., 1961). p.36.

『カスター・ブリッジの市長』(以下『市長』と略す)におけるドナルド・ファーフレー、あるいは『ダーバヴィル家のテス』(以下『テス』と略す)におけるアレックのような部外者による、静かな農村共同社会の「侵食」の物語を描くのである。純朴な田舎の男女である主人公にとって、結末はたいへん悲惨なものである。それでも、小説は災禍に直面した際の禁欲的な静けさを伝え表現するのであり、最良の農村の人びとのもつ特徴的な態度、即ち自然は持続するものであることや、土地や共同社会に対する労働が全て無駄になることはないということを知る人びとの態度を、懐かしむのである。このことは、不信心や享楽主義が蔓延する「近代」に対する、田舎の住民の精神的な貢献を表現したものである。<sup>(15)</sup>

ブラウンはマルクス主義者ではない。彼は想像される農村の悲劇についての説明を構築するために、19世紀英國史にかんするトーリー、フェビアン社会主義、そしてロマン主義的な史観に依って描いた。<sup>(16)</sup> 彼は、農村の過去についてのロマン主義的見解にハーディを結びつけ、1870年頃までの英國における生活の事実として、有機的な農村共同社会が存在していたと信じていたようである。他方、アーノルド・ケットルは、<sup>(17)</sup> ブラウンのアプローチに賛辞を与ながらも、農村史に関するマルクスの解釈にもっと近い形で、自分の『テス』についての解釈を確立した。<sup>(18)</sup> ケットルにとって、『テス』は決して英國農業の新しい突然の危機に言及したものではない。むしろこの小説のテーマは、資本主義的農業の長期にわたる興隆にある。

そのテーマは、19世紀中に農民層の解体(過去に深く根づいている過程)が、その最終的かつ悲劇的な段階に達したことである。資本主義的農業経営が普及するにつれ、…独立の伝統や独自の文化をもつ小地主である古いヨーマン層や小農民は、消滅を運命づけられた。歴史の発展諸力は、彼らと彼らの生活様式にとってあまりにも強いものであった。そしてその生活様式は誇り高く根づいていたものだけに、その崩壊は苦痛をともなう悲劇的なものになったのである。<sup>(19)</sup> 『テス』はその崩壊の物語であり象徴なのである。

小説と社会的過程を厳密な類推で描くこのような試みは、すたれてから久しい。ブラウンやケッ

注 (15) *Ibid.*, p.101ff.

(16) ブラウン自身、英國農業史については、(フェビアン社会主義) R.C.K. Ensor, *England, 1870-1914* (1936) pp.115-121, 284ff; (ロマン主義) G.M. Trevelyan, *English Social History: a Survey of Six Centuries, Chaucer to Queen Victoria* (1941 edn.) esp. Ch. XVIII [松浦高嶺他訳、『イギリス社会史』全2冊 みすず書房 1971-83年]; そしてとりわけ(農業保護主義者) Rider Haggard, *Rural England* 92 vols. (1906) の影響を認めている。Cf. Brown, *op. cit.* (1961), p.v.

(17) A. Kettle, *Introduction to the English Novel II: Henry James to Present Day* (1953) p.49.

(18) しかし、彼はおそらく先駆的な英國社会史家、ハモンド夫妻やR. H. トニーからも影響を受けていた。J.L. and B. Hammond, *The Villege Labourer: a Study in the Government of England before the Reform Bill* (1912); R.H. Tawney, *The Agrarian Problem in the Sixteenth Century* (1912, repr. N.Y. 1966).

(19) Kettle, *op. cit.*, p.49.

トルのハーディ論が、実際に英國農業に起こったことについては、余り信用できない指針であることを示すことは歴史家にとって難しいことではなかった。例えばT.W.フレッチャーは、英國のあらゆる地域を襲うような画一的な農業不況はなかったことを示した。概して北部と西部の酪農業は繁栄をつづけ、南部・東部の大規模穀物生産者が不況の影響を受けた。実際、その境界線はハーディの里であるドーセット州のなかを通りいる。<sup>(20)</sup> 1880年代にドーセット州の小農場主に不況の影響があったという若干の証拠があるが、<sup>(21)</sup> ジョーンズによればドーセットのチョーク土壌の大規模混合農場は、東部諸州の資金不足の小農場や特化された穀物生産者よりも不況をのりきるには有利な位置にあったという。このような見方は、英國南西部とアルフレッド大王支配下の古代サクソン王国が二重のモデルとなっているハーディの想像上の構成物「ウェセックス」より、地理的にずっと広い視野をもっている。彼らは数量的タームでの回答を求めるのである。ハーディの特殊な地方の観察は歴史研究に課題を投げかけるかもしれないとしても、ハーディがそのように数量的な何かをもっていると、我々は仮定すべきではない。例えば『遙か群衆をはなれて』(1874年)におけるバスシーバ・エヴァーディンの混合大農場や、『テス』(1891年)における酪農夫クリックの繁栄するタルボットヘイズの牧場に不況の兆候はない。

同様のことは労働者の生活水準についてもいえる。農村労働者全てがこの時期劣悪な状態にあったわけではない。都市への移住も、農村の労働市場における供給過剰を緩和させた。羊飼いや乳搾りのような熟練労働者は、より高い賃金や良い待遇を得ることができた。<sup>(23)</sup> 一般的にいえば貧困は、工業化が労働力に対する競争を激化させ農場主によって支払われる賃金を上昇させた英國北部諸州よりも、ドーセットの農業労働者のほうに広範に拡まっていた。ただここでも、数量的な回答が必要とされる問い合わせが生じてくる。ダービーフィールド家の貧困は確かにドーセット村民の典型ではあ

注 (20) Fletcher, *op. cit.*, p.417. フレッチャーの論文は、P.J.Perry(ed.), *British Agriculture, 1875-1914* (1973) pp.30-55. に再録されている。ペリーによるフレッチャー論文の再検討 (pp.xi-xliv.) も参照のこと。ペリーの総括的な結論では、19世紀後期に英國農業は苦痛に満ちた再調整を伴う深刻な不況にみまわれたものの、それが全国的なものであったとするのは適切ではないとしている。

(21) *Ibid.*, pp.129-148.

(22) E.L.Jones, *Development of English Agriculture, 1815-1873* (1968). [亀山潔訳「19世紀イギリス農業の発展」『イギリス産業革命期の農業問題』成文堂 1978年]

(23) E.L.Jones, "The Agricultural Labour Market in England, 1793-1872", *Ec.H.R.*, 2nd ser., xvii, 1964. 楽観的な解釈ではないが、それでも「ウェセックス」の生活水準が多少改善したとみるものと両立するものとして、E.H.Hunt. "Labour Productivity in English Agriculture, 1850-1914", *Ec.H.R.*, 2nd ser., xx, 1967. pp.280 特に p.286. も参照。ハントは以下のように要言する。「概してその証言は、1914年以前には、英國の農村住民の多くが栄養不良で、効率的に働くことはできなかった」と強く示唆している。(p.288) 農業の生産諸関係の有用な概観と、南西部における乳搾りに関する興味深い証言については、J.Kitteringham, "Country Work Girls in Nineteenth-Century England" in R.Samuel(ed.), *Village Life and Labour* (1975) pp.73-84 and 1-21. 参照。

るが、歴史家にとっては、それだけではまだ不況の影響を被った人びとの数についての正確な証拠を得てはいないのである。

## 2. 小説と「全体史」

プラウンやケットル等の研究は、ハーディの小説を、19世紀末ドーセットにおける現実の経済状況と類似するものとして扱っている。すでに示唆したように、このように小説を歴史的証拠として直裁的に「反映論的」に使用することは、フィクション論においてもはや受けいれられない。歴史家は特定の現象に関する特定の観察については小説にあたってみることができるかもしれないが、小説家が典型性や数量化に関する質問について信頼できる回答を歴史家に提供することは余りないことである。しかし、ハーディの提供するものが、ドーセットの社会史の解釈ではなく、「全体史」の解釈である、ということは主張できるかもしれない。その場合、ハーディの小説を特定の一連の出来事に結びつける試みの代わりに、資本主義全体の才能ある解釈者として、ハーディを「歴史のなかにおいて」みるべきであろう。『英国の小説：ディケンズからローレンスまで』のなかでレイモンド・ウィリアムズは、ハーディの小説は発達する資本主義国英國の知識人に対する特別な意味をもっている、という。19世紀と20世紀において、拡大する知識人グループのうちの多くが、ハーディ自身もそうであったように、社会的上昇を経験した。いってみれば、彼らは自分自身が二つの生活様式、あるいは二つの文化の「ボーダー・カントリー<sup>(25)</sup> 境界の地」にいることを発見したのである。即ちその二つとは、富裕層の個人主義と、知識人たちが教育を受けることによって抜け出てきた下層階級の共同社会の慣習的な生活とである。ハーディの小説家としての偉大さは、こうした個人的な経験と社会変化の相互関係を描く能力、一言でいえば文化的なある時代の歴史を描く能力をもっていることがある。

各個人にとっては、この経験は疎外である。教育は彼らを権力や物質的利益のために生きる人びとに対して批判的にさせるが、一方では労働者階級の限定的な生活にも不満を抱かせた。もし彼らが、一度は抜け出した労働者階級の共同社会に関わりつけようとすると、『帰郷』におけるクリム・ヨーブライトのように共同社会から反発され孤立することになる。また、もし彼らが、富と権力への競争に加わると、同じように『市長』におけるマイケル・ヘンチャードのように疎外感を味わうことになる。これらの小説にあるように、そうしたジレンマは恋愛や結婚における選択という形で劇的に表現されるが、ハーディは発展する資本主義経済下での農村共同社会の「長期的な危

注 (24) 例えばつぎのような理論的立場からの反論がなされている。(a) 象徴主義者。A.J.Guerrard, *Thomas Hardy*(1964) ; (b) アリストテレス学派。D.Lodge, *The Language of Fiction* (1966) pp.3-48 ; (c) 脱構築主義者。J.Hillis Miller, *Thomas Hardy : Distance and Desire*(1970) pp.20-75 ; (d) ポスト・ソシュール主義者。Belsey, *Critical Practice*(1980) pp.37-47.

(25) Williams, *English Novel from Dickens to Lawrence*, p.99.

機」が念頭にあるために、この疎外の経験と労働や事業や共同社会の経験との相互関係を認識するのである。

全ての共同社会と同様に、彼らは資本主義的競争の諸力による崩壊の脅威にいつも晒されている。ハーディの作品は、単にあれこれの類の行動の反映としてだけではなく、動態的な歴史過程ないしは全体性をもつものとして状況を把握しうる「究極のリアリズム」なのである。彼は、農村労働者の共同社会の真正なる人間的結合を観察し記録する能力を通じて知識人の多くに訴えかける。いいかえれば共同生活に対する人間性の潜在力を表現するのである。このようにして共同社会の悲劇は、それぞれに感情浄化を及ぼすのである。

もちろんウィリアムズは、ジョルジュ・ルカーチ等を先駆者とするマルクス主義的人間主義という批評の伝統の内部で仕事をしてきた。この伝統においては、小説が「歴史」であるのは、小説が実際生じたことを忠実に跡づけるからではなく、小説が過去の人間の経験の全体性や、そこでの人間の成長や発展への潜在性を表現するからである。

小説におけるこうした「リアリズム」論に関しては、二つの問題が生じる。一つは、それが19世紀英國の農村貧民の共同社会的価値観に関する証言の解釈として信頼できるのかという問題であり、もう一つは、それをハーディの小説の「意味」として受け入れができるのかという問題である。まず第一の問題から考えてみよう。

### 3. 共同社会と階級

歴史家E. P. トムソンは、ウィリアムズと同じ伝統のなかで、およそ1760年から1830年にかけての産業革命期における南西部の農村貧民の経験の再構築を試みた。<sup>(26)</sup> トムソンにとって『市長』は、小さな市場町の社会関係について、支配的な穀物商人の利害と労働者共同社会とがどのようにして分極化するようになりえたかを示すものである。市長マイケル・ヘンチャードは、地方貧民が生存のために依拠している穀物に対して投機を行う。穀物は、あたかも「到来しそうもない飢饉を待つ」(9章)かのように彼の手元に貯蔵される。しかしその貯蔵の目的は、聖書にあるヨゼフの物語のようなものではない。むしろヘンチャードは、穀物が欠乏し値段が上がったとき、即ち貧民がそれを最も必要とするときに、売るために貯蔵するのである。

ヘンチャードが、人間の消費には適さない穀物をパン屋に供給したとき、カスター・ブリッジの共同社会には緊迫した状況が生じる。貧民は空腹に悩まされるだけでなく、ヘンチャードが批判者たちに、貧民を救済する方策はないのだと説明するのを、力なく聞かねばならない。しかしその説明は、ヘンチャードの貯蔵庫で働く人びとにとては、見えすいた嘘である。この「道義に基づかない

注 (26) G. Lukacs, *Studies in European Realism* (N.Y. 1950).

(27) Thompson, "The Moral Economy of the English Crowd", p.50, p.94ff.

パン」（ヘンチャードのもとで働く労働者の一人が4章でそう呼んでいる）を食べることを強いられるという経験が、ヘンチャードから貧民を離反させる。収穫期の緊迫した日々に、彼らはヘンチャードがかつて秘密裏に妻スザンを売りにだしたこと、さらにルセッタと密通したことを知ることとなる。そうした上位に位置したものの側の偽善が、穀物を蓄めこんだ罪を悪化させ、スキミントンの行列や、嘲りの集会によって、悪行が公に暴露される好機を醸成することになる。<sup>(28)</sup>

トムソンの研究は、資本主義の発展が加速化した時期の農村共同社会の政治に関する現実の歴史と、ハーディの小説との間の密接な対応関係を明らかにすることになった。16世紀以来のチューダー法制では、市場における穀物販売を規制し、パンをつくるために貧民が穀物を買うことができるよう保証することが、市長に求められていた。18世紀末までには、法規上の通用性はまだ判事には知られており、少なくとも何人かの牧師が依然真剣に考えていた貧民には施しをという聖書の訓令は残っていたにもかかわらず、実際にはこれらの法律は有名無実化していた。トムソンは、法外な欠乏と高価格の時期に、貧民が投機的な穀物商人の貯蔵庫を襲ったことを明らかにする食糧暴動の研究において、その際くり返し起こる型を指摘する。貧民たちはたんに穀物を盗んで食べてしまうのではなく、往来で彼ら自身でマーケットを開き、（チューダー法制下で市長がつけるべき）公正価格で穀物が売りにだされた。トムソンはこのような行動のなかに「モラル・エコノミー」が表現されているのを見いだした。「モラル・エコノミー」は、人間的結合の価値観や、貧民に対して面倒をみるという富者の義務のうえに成り立つもので、当時強引に存在するようになっていた自由放任的資本主義の新しい「ポリティカル・エコノミー」とは対立するものである。貧民たちの行動は、過去の温情主義の伝統を回顧するものであり、トムソンもまた、こうした貧民の行動を回顧して、それを当時はまだ潜在的であった近代社会主義の未来と結びつけることができた。こうしてトムソンは、貧民の行動に、英國労働者階級の展開における推進力としての「意味」を認めるのである。

このようなある時代全体の広範な解釈は、歴史家の頭脳内部の分析用具の一部である。こうした解釈から完全に自由である歴史家はいない。我々の現在の目的にとっては、それらの解釈が由来するのが小説家であるか歴史家であるか、それとも社会学者であるかは問題ではない。解釈が想像的基礎を形づくり、いかなる歴史家も、そこから彼らの仕事をはじめるのである。ただ、これはある解釈が他の解釈と同等に優れているという意味ではない。一つの解釈、即ちあらかじめ形づくられたモデルは、対象となる問題について歴史家の間で知られている全ての証拠に意味をもたせる範囲でのみ受け入れられる。もしトムソン（あるいはハーディやウィリアムズ）の解釈が19世紀初頭の英國労働者階級の行動や態度に関する証拠に適合しないとしたら、それは修正か置き換えが必要となる。

注 (28) E.P.Thompson, "Rough Music :le Charivari Anglais", *Annales*, 27, 1972, pp.285-312. [福井憲彦訳「ラフミュージック」二宮宏之他編『魔女とシャリヴァリ〈アーネル論文選1〉』新評論1982年]

トムソンの先駆的研究は、確かに多少印象主義的ではある。食糧暴動に関するより体系的な研究では、彼の結論全てが支持されているわけではない。1790-1810年のデヴォンにおける食糧暴動の研究は、暴動参加者たちがテューダー的温情主義<sup>バターナリズム</sup>に訴えかけることは余りなく、極めて近い過去の経験との関連で価格を実用的に設定するよう行動したことを示している。<sup>(29)</sup>もっと純粋な農村共同社会では、貧民は余りに地方農場主や地主への依存度が高いために暴動は起こせない。マンチェスターーやバーミンガムのような工業都市でも食糧暴動はあったが、蜂起の型や上層階級の対応は南西部とは異なっていた。こうした比較研究をもとに、食糧暴動に関する新しい説明がなされている。暴動はたんに空腹が原因なのではない。また、たんに自由放任主義の実施に反対する貧民の憤慨から生じたものでもない。暴動は、働く人びとが自分たちの互助ネットワークをもつような、そして共感に信頼を寄せることができ、少なくともその地方の治安判事は中立でいるような共同社会で発生したのである。英国の食糧暴動に関するこうした解釈は、『市長』からは引き出しえないことは明らかである。

トムソンの先駆的研究は、歴史家が社会集団の心性のモデルをつくるために小説を使用することの、興味深い例を提供している。こうしたモデルは、歴史の機械論的諸理論から引き出される現象的な行動主義的解釈のいくつかに対する、貴重な対抗的解釈（と呼ぶことができよう）を提出している。しかしこれらの理論が、歴史的事実としての特権的地位を与えられるべきではないように、小説もまた、特権的地位を与えられるべきではない。南西部の食糧暴動をテューダー的温情主義に結びつけるのに、トムソンはおそらく『市長』の「道義に基づかないパン」についての言及に過度に影響されていたが、しかし小説のなかの登場人物の意見を、社会集団全体の心性の証言として特別視すべきでないことを認めたのもまた、彼が最初であろう。

ここは「英國における労働者階級の形成」についての、こうした疑問を解決する場ではない。重要なことは、ハーディについてのいかなる解釈にも、英國労働者階級史の鍵としての特別な地位を与えることはできないということである。ある解釈は、可能性のある多様なモデルのなかの一つにすぎないのであり、それが、新聞、書簡、議会報告書など入手可能な史料に適合するものかが、歴史学的手法によって試されるのである。

#### 4. ジェンダーと歴史学

英國労働者階級の歴史に関する社会主義的人間主義の解釈の妥当性は、それを新たに発見されてくる歴史的証拠との関係において議論しつづける歴史家たちにとって一つの課題である。ハーディの小説に関する解釈の妥当性とは何であろうか。この問題は、最近K. D. M. スネルによって（後

注 (29) Bohstedt, *Riots and Community Politics*, p.212.

(30) E.P.Thompson, *The Making of the English Working Class* (1963).

述するように、多少不明瞭ではあるが) 挑戦されている。スネルがいうには、ハーディは「真剣に共感をもって労働者の…主体的な経験や、…ドーセットにおける現実の生活状態に入りこむことのできる」ような、いかなる種類の社会主義者でもない。彼が描く農村労働者像は、決まって「農夫」という語で表現され、「狩猟法、低賃金、農場主の見栄をはった生活、あるいはひどい食事、家族の生活維持の困難さ」に反対して現実の労働者たちが表明する苦情には無関心である。これはハーディの社会的展望が急進的なものではなく、「ロンドンに密接な文学上の関係をもつ、市場町ドーセットの中流・知的職業人階級の孤立した教養ある一員のものである」からである。ハーディが労働者の苦情についての同時代の報告を無視し、現実の労働者の扱いに関する罪を緩和するような「ロマン主義や田園的虚飾」に置換してしまうのは、こうした読者のためなのである。スネルはこのことでハーディを非難してはいない。ハーディの目的は、ゾラのようなやり方で真実に迫ることではなく、「隠喻、象徴、予兆として」地方の細部観察を使い、審美的に描くことなのである。彼は、人間生活の潜在的な悲劇性に関する、自分自身の「運命主義、悲観主義」の感情を伝達したかったのである。

しかし、ハーディの「リアリズム」についてのこの「審美的」見解は、文学社会学の可能性を排除するものではない。そしてまたこうした社会学が、ハーディの場合には、農村労働者階級に関する彼のイデオロギー的見解を示すことに否定的な業績だけに限定される必要もない。スネルは、我々の視点を階級からジェンダーに移すならば、社会の論評者としてのハーディに対する積極的な評価が可能になるという。主要な小説においてハーディは、「情愛の深い長続きする関係が起こりうる諸条件を定式化する」ことを試みた。彼は「偽りの結婚」において生じる男女の葛藤を痛烈に意識し、ほとんどどの作品でもそのことを書いている。

ハーディの悲観主義は、彼自身の不運な結婚の経験に根ざしており、スネルによれば、こうしたことは当時の社会的エリートに幅広く共有されていた。何世紀もの間、英国の上流階級は、財産や覇権を拡大するものとして結婚を扱ってきた。野心によってねじ曲げられた結婚は、相互の無関心や敵意、不義や売春につながった。

それとは対照的に、その生存に妻の現場労働が不可欠であるような小借地農や職人層といった「生活維持者」階級(そして労働者の家族労働単位)の共同労働や家庭生活は、結婚を相互依存によって規律化される相対的に平等なパートナーシップにした。本物の仲間意識が育つのはこうしたパ

注 (31) Snell, *Annals of the Labouring Poor*, pp.374-410.

(32) *Ibid.*, p.392.

(33) *Ibid.*, p.381.

(34) *Ibid.*, p.399.

(35) *Ibid.*, p.392.

(36)(37) *Ibid.*, p.398.

(38)(39) *Ibid.*, p.399.

ートナーシップにおいてのみである。『遙か群衆をはなれて』の56章で語り手はこう述べている。

たいてい日々の仕事の親近性を通じて起きるこうした良き友情—同志愛—が、男女の恋愛にまで加えられることは不幸なことに滅多にない。というのは、男と女は、労働においてではなく、たんに快楽において結びつくからである。  
コマラディー

スネルは、レイモンド・ウィリアムズがこうした慣習的労働の共同生活を記述するハーディの能力を認める注釈を引用するのだが、しかしスネルはさらにすすんでハーディのノスタルジーや悲観主義の感情が労働者階級の家庭生活における生活維持者の消滅や、性的分業の増加といった社会の現実によることをつきとめる。ドーセットではこれらの変化は他の場所よりも遅く生じた。旧来のあり方はまだハーディの少年期にはみられたが、変化は1860年以降加速はじめた。ハーディは同志的結合のこうした状況が消失するのを嘆き、スー・プライドヘッドやテス・ダービーフィールドといった女性のなかに、19世紀後半の満たされない若い女性の「性感情のない人間」を含む「近代的神経」を描き込んだ。<sup>(41)</sup>

スネルが家族史を強調することは、（彼の著作で指摘されているように）ピーター・ラスレットの影響を示唆している。<sup>(42)</sup> ラスレットは、「文学社会学」への一つの方法として、小説の諸著作との関係において家族史を研究することをあげた。そうした社会学は、性的行為のイメージを、結婚年齢や私生児の割合といった長期的な人口学的変化と関係づけることによって特定の小説の創作から説明するであろう。ラスレットは、我々が詩、劇、小説を歴史に関連づけようとするときに扱わなければならないのは、審美的な創作物であること、そしてその作品に出てくる全ての表現が、既知の歴史的事実と正確に対応するものであるという期待をもつべきではないこと、を警告する。このようにスネルはラスレットの推奨する方法にしたがっているかのようにみえる。スネルがラスレットのアプローチから踏み出していることは、社会的過程の「メカニズム」によって創作された結果として生じた効果としてよりも、「社会史への反応」としてハーディの小説をみなしていることである。<sup>(43)</sup> スネルは、ヴィクトリア時代の結婚について述べようとする意図が強く表明されている、ハーディの小説の序文から証拠を引いている。<sup>(44)</sup> このことはラスレットの大胆な還元論よりは望ましいことに思えるが、しかし、ハーディにおける歴史の悲観主義的な解釈に「意味をもたせること」を意図するこれらの所説から、我々は前進することができるだろうか。スネルは明白にできるとはいわない<sup>(45)</sup>。<sup>(46)</sup> <sup>(47)</sup> <sup>(48)</sup>

注 (40) *Ibid.*, p.404.

(41) *Ibid.*, p.408.

(42) *Ibid.*, p.ix. Cf. p.375.

(43) Laslett, *op.cit.*, pp.319-342.

(44) *Ibid.*, p.339.

(45) *Ibid.*

(46) Snell, *op. cit.*, p.410.

(47) *Ibid.*, p.399.

(48) *Ibid.*, p.410.

のだが、それにもかかわらずハーディの作品が、ヴィクトリア時代の上流階級の感傷主義者が好んだような超時間的な過去へのノスタルジーと対になって、ハーディがしばしば書きとめたような運命論や悲観主義の意味を伝達しているということについてはスネルは確信している。

これは、ハーディの小説に、レイモンド・ウィリアムズのようなやり方で歴史主義的解釈を与えるものではない。唯一の（しかし重要な）相違は、スネルがハーディに神話的な黄金時代へのノスタルジーと未来への悲観主義だけをみるのに対し、ウィリアムズは「審美的な」人間の価値観の発展への潜在性をみていることである。

歴史に対するこれらの考え方のうち、どれがハーディの小説の意味を構成しているといえるのだろうか。この問いにたいし、以下の二つの章で、とくに『市長』と『テス』を参照しながら、答えてみようと思う。というのは、この二作品は、しばしば人生についてのハーディの最も悲観的な人生観が集約されているものとして、受けとられてきたからである。

## 5. 歴史の意味すること

しばらく『テス』に集中しよう。この小説には人間の条件の悲観主義的像が充満している。テスは、地球を「荒廃した星」であると記述する（4章）。自然は循環する。惑星や星は、テス自身の人生のように、「人間生活から離れた静かなところで」、光や暗闇という「位相」を回転する（同章）。人生自体は、出生、衰弱、死の終わりのない循環である。いかなる創造物も、この激しく回転する刈入れ機の刃から逃れられるものではない。少なくとも動物たちは自分の「運命」（14章）に無意識であるが、人間は死が確実なものであるという認識に直面しなければならない。これは「近代主義の痛み」であり、宗教の信仰で癒されるものではない。人間に対してはいかなる幸福も保証されない。「冷静な自然法則」（23章）が、自然の創造物をしてささやかな快樂を探すことによらせるが、満足は保証されないのである。

物事の好判断にもとづく計画も、誤った判断にもとづいて実行されれば有望なことは滅多に創り出されず、恋人たちも愛している時間が一致するということは余りないのである。創造の女神が、幸福なことへの展望がみえるときに、貧しい人間たちに向かって「見よ」ということは、滅多にあることではない。あるいは、人間の「どこ？」という叫びに「ここだ！」という答えが返ってくることもなく、隠れん坊遊びは退屈でつまらないものになってしまふ。（5章）いかなる発展的進歩や社会組織の改革も、これらの「時代錯誤」を正すと考えることはできない（同章）。

ピーター・ウィドソンが示したように、<sup>(49)</sup> デヴィッド・セシル卿のようない期のハーディの批評家たちは、<sup>(50)</sup> たいていこうした過度の悲観主義に不服をとなえる。レイ・モレルのようない後の批評家は、<sup>(51)</sup>

注 (49) Widdowson, *Hardy in History*, p.16ff.

分別ある人間行動の潜在性をもって悲観主義に対抗する人間主義者ハーディを強調する。形式主義的批評家は、古典的悲劇の伝統に、ハーディの小説をつらねようと試みた。デヴィッド・ロッジにとって、ハーディの小説はロマン主義とダーウィン主義という、自然に関する二つの相容れない見解によって分裂した状態にあるという。悲劇性を強調する古典的見解と「リアリズム」とを調和させようとするジャネット・キングに代表されるような批評家さえも、ハーディの小説の「リアリズム」が、アリストテレス流の詩論と適合するかどうか、いぶからざるをえない。<sup>(52)</sup><sup>(53)</sup><sup>(54)</sup>

それ故学問的な文芸批評では、概して人間主義的ないしは古典的批評の立脚点からのみ、条件付きの是認がハーディに与えられると考えられた。しかしながら、フィクション論におけるポスト・ソシュール主義の発展は、ハーディの小説をより高く評価する新しいアプローチを生みだした。ハーディの小説は事実、矛盾し選択可能な意味をもち、分裂していることが同意されている。しかしながら、「ポスト・ソシュール主義的批評」にとって、このことはまさに我々が期待すべきものなのである。小説は「言説」として、コミュニケーション行為として理解されるべきであり、その意味合いは、歴史学的あるいは科学的言語のように、「実際生じたこと」とは直接関係するものではない。それよりも、これらは神話やイデオロギーに関係している。「リアリスト」の小説はこの点においては他のものと変わりはないが、ただ一つ、それが「閉鎖性」の幻想を創造する点でのみ異なる。その閉鎖性のなかでは、叙述者によって提供される以外には、明確にその話の筋を問う余地は現れない。そうすることによって「リアリスト」の小説は、ヨーロッパ人の非ヨーロッパ人に対する、あるいは中産階級の男性の労働者階級や女性に対する権力を支えるような神話に訴えかける。こうした神話のうち、最も強烈なものは人間主義であり、それは各自の経験から卓越した価値観を与えるような言説のなかの主体を構成するものである。小説のなかで人びとにふりかかる苦痛や災難がどのようなものであろうとも、我々は、それが「善良な」人間への発達にとってあれ、普遍的な美德への「人間」の歴史的発展にとってあれ、「価値あるもの」として「理解する」ことができる。「閉鎖性」のもとでのこうした試みは、著者の「真の」視点にみあう価値観もないままに、リアリストの小説を「拡散させる」ような乖離と沈黙を残す。人間主義的文芸批評は、伝統的に主体の経験の完全に人間的な価値観を示すような、「優れた」文学作品の模範を確立しようとしてきた。ハーディについてもこの模範に照らして判断され、物足りない点が指摘されている。しかし小説のテクストは、その本性からして、こうした分類には抵抗する。テクストは「多義的」なのである。個々の読者は、それぞれの社会的視点に従ってそれらの意味を解読する。そのテクス

注 (50) Lord David Cecil, *Hardy the Novelist* (1943).

(51) R.Morrell, *Thomas Hardy : the will and the way* (Kuala Lumpur, 1965), pp.1-28.

(52) D.Kramer, *Thomas Hardy : the forms of tragedy* (Detroit, 1975).

(53) Lodge, *The Language of Fiction*, p.161ff.

(54) J.King, *Tragedy in the Victorian Novel : Theory and Practice in the Novels of George Eliot, Thomas Hardy and Henry James* (Cambridge, 1978) p.158ff. Cf. pp.97-125.

トを脱構築し、各自の神話を創造することは、読者にとって正当なことなのである。

ハーディの小説は、批評のアプローチの幅広い多様性により、こうした過程に従わされてきた。ヒリス・ミラーは、キリスト教信仰の崩壊によって精神的価値を奪われた近代世界にとっての、それに代替する宗教信仰に達するような時代の神話というものを、ハーディの小説に見いだす。フェミニストの批評家は、人間主義の神話と「リアリズム」の幻想的な技法から完全には解放されていないものとして、ハーディを見る傾向がある。この議論によれば、このことはハーディの描く女性像が、悲劇中の彼の女性嫌いの視点、または彼の時代に流布した性に関する科学的イデオロギーの主体として構成され、女性像は「沈黙」させられることをもたらしている。<sup>(55)</sup>

ウィドスンは、社会主義的ないし革命的なハーディ像を構築することを好む。ハーディの小説は反リアリスト的であり、またキリスト教や人間主義のイデオロギーに対しても同じように対立し、<sup>(56)</sup> 資本主義社会に浸透した階級とジェンダーの搾取を暴露するというのである。二律背反的な矛盾をかかえる小説は、革命的実践のための「もう一人のハーディ像」をつくることを許容する。この種のポスト・ソシュール的批評は、その目的において全く政治的である。それは全ての批評が政治的即ちイデオロギー的な機能をもつと主張する。それは文学のテクストからある特定の意味を「創作」し、他のものを抑えてしまうように機能する。「批評活動」はしたがって、現在における急進的、革新的な変革にとっての必要性に応じて意味を創作する。たとえその意味が、そのテクストにおける他の意味を抑えてしまっても、である。批評家は、彼の役目がフィクションの創作にあることを認識すべきである。彼自身、「作者」でもあるのである。

こうしたアプローチは、ハーディを余りに自由に受けとりすぎる。彼の小説が我々に問題を提起しているのかを議論することと、その小説が我々の好む回答を用意すべく書かれているか議論することは、全く別の事柄である。こうした反論があることは、ハーディに関する最も洗練されたマルクス主義的批評家である。ジョン・グードによって認識されている。グードの趣旨は、ロラン・バトルよりはむしろバフチーンから引きだされたもので、<sup>(57)</sup> ハーディの叙述の技法は、読者に対し（解答よりむしろ）疑問を投げかけている、という極めて合理的で説得的な説明をする。グードは、『テス』のなかに当惑させる視点の二重性があるとみる、ロッジのような批評家に同意する。テスは同時に二つの言説のなかに設定されている。一つは、「自然のままの新鮮で清純な娘」として、もう

注 (55) Miller, *Thomas Hardy*, pp.237.

(56) Cf. E. Showalter, "The Unmanning of the Mayor of Casterbridge" in D. Kramer (ed.), *Critical Approaches to the Fiction of Thomas Hardy* (1979) pp.99-115.

(57) P. Boumelha, *Thomas Hardy and Women: Sexuality and Narrative Form* (Brighton 1982), p.1ff.

(58) Widdowson, *Hardy in History*, p.196ff. ハーディは強い女性を恐れていたとするフェミニストの批評にウィドスンは同意している。p.214ff.

(59) Goode, *Thomas Hardy*, p.111.

(60) Lodge, *The Language of Fiction*, p.161ff.

一つは「自然の冷酷な法則」の犠牲者として、彼女をみるものである。しかしグードは、要約するにはどちらの言説をとっても不十分であることを認識させるような小説の読み方に、読者（そのような読者はたいてい男性である）をまきこむような「科学的ゲーム」をハーディはしているのだという。このことは、読者の代理人として行動するいろいろな登場人物 一散歩の途上でブロックムア・ヴェイルにきた「旅行者」、田舎の駅の場面で列車の窓からあたりを見回している暗示的な鉄道の乗客、あるいはエンジェルー に視点を与えることによって、イデオロギー的にテスやその周囲の人物たちを、現実の生きている人間としてよりも、むしろ「大地の子」としてみなすような意味が表されてくる。こうして、覗き見的にテスの世界をかいしま見ることによって読者は、自然・生産・ジェンダーについての多様なイデオロギーに従って彼女の像やその世界を構成する。これらは全て抑圧的なものである。しかしそれらは、テスから逆に見つめられることになる。テスはたんに見るだけでなく、理解するようになってくる。彼女は、自分への被害が、自然法則からではなく、キリスト教や彼女を搾取するミドルクラスの男たちといった、人間の「冷酷な法則」からきていることを理解するようになる。そしてこの旅をすることで彼女は、フェミニストの批評とは逆に、エンジェルへの後の手紙が示すような、彼女自身の声、「彼女の物語を語る」能力をみつけるのである。『テス』やハーディの他の小説に対するグードの読み方は、驚くほど脈絡化されている。彼は、いかにハーディの叙述技法が、同時代の小説や他の言説が答えをもたないような疑問を投げかけ、困難な疑惑を読者に強いているか、ということを示すのである。

しかし、グードの考えているような読者は、どのような答えをだせるのだろうか。これについてグードは奇妙にも沈黙してしまう。可能性のある答えが、結婚や家族の法律を変え、もっと男女の性的本性を保持する新しい「精神」を構築する政治行動を含むものである、ということはヒントになろう。<sup>(61)</sup>しかし、それぞの状況のなかで人間が自分自身の歴史を創造できるとするこの可能な読解は、抑圧されているように思われる。少なくともこれは、そうでなければ驚くほど強固で明白な議論へ、かなり混乱した一文が挿入されたようにみえる。

自然のイデオロギー的言説および生産の社会関係の言説は、返答と態度の対立する換喻（それは生命の繰り返される「リズム」と歴史の「進行」にそれぞれ対応している）に相当しているし、愛の対象を人間が創造するものという隠喩を有する兆候として構築するジェンダーの発見（それ故、そのこと自体が最終的には犠牲の石の上に成り立つことを宣言している）に相当しているけれども、自己確立の信号は、投げかけられたものであれ、返されたものであれ、凝視すること<sup>(62)</sup>にある。

グードの力強いここでの主張は、ややこしく絡み合っているように思われる所以、我々は不公平な批判を避けるためにそれを脱構築しなければならない。彼の主張は次のようにある。『テス』は、

注 (61) Goode, *Thomas Hardy*, p.118. Cf. p.114.

(62) *Ibid.*, p.112.

歴史を換喻的語句<sup>(63)</sup>に還元する言説のレベルで、即ち「生命のリズム」（機械論的および生物的）あるいは進歩的諸力の「進行」によって生じる過程に還元する言説のレベルで読むことができる。『テス』は、「人間が創造する」過程として、即ち個々の主体は他を愛の対象として自由に構築できるという過程として、読むことができる。しかし『テス』は、これらの言説のどれも保証しない。それは、閉鎖に反対し、読者の当惑する覗き見に対して、疑問を発するテスの答えようとしている外観と声だけを返答しているのである。

しかし、ハーディのテクストは、実際このように「異説注釈的」なのだろうか。この種の批評が示すことなのだが、閉鎖性に抵抗するものと規定することは、個々人への多大な負担を頻繁にかけるにもかかわらず、男女が自分自身の歴史を創造することができるとする人間主義的な読解を本当に抑えてしまうことになるといえないだろうか。私は、グードも容認するだろうが、こうした意味が、そのテクストのなかに存在するのだということを（グードが示唆しているよりも明白に）主張したい。さらに、結末が開かれているということは、「歴史とはどのような過程なのか」という形の疑問に対する決まりきった答えにはそれ程刺激を与えないが、「恋愛や結婚をめぐる法制や伝統に関する、我々が自分自身の歴史を創造できるのだとしたら、何が問題となるのか」、といった形の疑問に対する定まっていない答えにはたいへん刺激を与える。最後に、ハーディが小説に書いている推論的テクストを完全に発展させることに失敗することによって、我々はこうした読解について得たものを失ってしまう、ということを主張したい。それを完全に成立させるには、（グードによって驚嘆すべき程に再構築された）ほぼ同時代の言説からひとまず離れ、ジャンバティスタ・ヴィーコと、19世紀の第二第三四半期において、保守的な方法でヴィーコの『新しい学』を解釈していた「自由・国教派」の歴史家たちの影のような存在に、目を向けなければならないだろう。

## 6. キリスト教と歴史学

ハーディは英國国教会のもとで育ち、それへの感情的な親愛感を失うことは決してなかった。彼は若いころ、詩人サミュエル・ティラー・コルリッジに深く感銘を受けたフォーディントン教区牧師の息子、ホラス・ムールと親密な友情を結んだ。<sup>(64)</sup> 精神形成期に、ムールは、古典、近代文学、そして歴史学を真剣に学ぶことをハーディに奨めた。ムールの学問上の専攻は初期教会史で、ナポリ大学で「ラテン修辞法」の教授であったヴィーコ（1688-1744年）と同じ分野であったことになる。したがって19世紀初期に、トマス・アーノルドのようないわゆる広教会派の歴史家によって発展し

注 (63) 詩句についての議論と、その歴史叙述との関係については、H.White, *Meta-History : the Historical Imagination in Nineteenth Century Europe*(1973), p. xff. and 31ff.

(64) R.Gittings, *Young Thomas Hardy*, pp.37-42. ; M.Millgate, *Thomas Hardy : a Biography* (1982), p.70ff.

た「自由・国教派の歴史観」に、ハーディがひき込まれたとしても不思議はない。ヴィーコに関しては、ハーディはJ. S. ミルや英國実証主義者を含む、ヴィーコを重視するヴィクトリア時代の思想家たちに親しんでいた。<sup>(66)</sup> ダンカン・フォーブスが示したように、(彼らの師S. T. コルリッジのよう)自由・国教派の歴史家たちは、1832年の選挙法改正にまつわる市民の騒擾や、1848年にヨーロッパ各地で高揚した革命運動に危機感を抱いた。彼らは、改正を1688年に確立された体制にミドルクラスの参加権を認めただけのものとみる、ウィッグ史家マコーレーには同意することができなかった。彼らにとって選挙法改正は、17世紀以来英國を支配してきた土地貴族と有産ミドルクラスの結束した権力に対する、プロレタリアの闘争のはじまりという、もっと不吉ともいべきことへの画期であった。<sup>(67)</sup>

彼らは同時代の諸条件を理解する際に、ヴィーコの古代ローマ史の論じ方や、『新しい学』で展開されている歴史の一般理論に導かれていた。<sup>(68)</sup> ローマ史理解の基礎のうえに、ヴィーコはある社会の崩壊のはじまりの明白な兆候として、有産者と無産者との革命的階級闘争をみたのであった。ハーディの『市長』や『テス』を、彼らのヴィクトリア期英國についての見解と比べるならば、自由・国教派的歴史観の影響が認められるものの、基本的なキリスト教信条についてはハーディの深い拒否が認められるであろう。

自由・国教派は、歴史の循環論という点でヴィーコの信条を受けついでいた。ダンカン・フォー

注 (65) H.M.Moule, *Christian Oratory : an Inquiry into its History during the First Five Centuries* (1859) では、自由・国教派の歴史家たちへの参照を多く含んでいる。特にミルマンについては、p.4n, 14. ムールは「キリスト教礼拝堂の最初の五世紀」をローマ帝国の、そして「人間の心の運動」の危機として表現する。彼は自由・国教派の歴史家ミルマンのフレームワークを引き継いでいる。Cf. Millman, *History of Christianity*. ムールは直接ヴィーコには言及していないが、彼の歴史哲学の影響が見いだされる (p.197)。初期の礼拝堂は、ルターのそれのように、「芸術」の表現というより「精神」の表現、即ち帝国の贅沢な時代においては無邪気な単純性をもつものであった (Cf. pp.196-7.)。ヴィーコの歴史段階論の私の以下の説明も参照のこと。

(66) J.S.Mill, *A System of Logic, Ratiocinative and Inductive* (1843), Book VI, Ch.1. Section 3. [大関・小林訳『論理学体系』春秋社 1949-59年]。ヴィーコの英國実証主義への影響については、Berlin, *Vico and Herder*, p.94.

(67) D.Forbes, *The Liberal-Anglican Idea of History* (Cambridge, 1952). フォーブスによって考察されている自由・国教派の歴史家は、トマス・アーノルド (1785-1842年。オックスフォード大学近代史欽定講座教授。 *History of Greece and Rome* の著者) ; H. ミルマン (1791-1868年。オックスフォード大学詩論教授。 *History of Latin Christianity* と *History of the Jews* の著者。) ; A. P. スタンレー (1815-81年。ウェストミンスター司祭。オックスフォード大学教会史教授。) ; ジュリアス・チャールス・ヘア (1795-1855年。ケンブリッジ大学トリニティカレッジ古典学講師。) ; キャノン・サーワル (1797-1875年。聖デヴィッド司教。) ; リチャード・ウェイトリー (1787-1863年。オックスフォード大学経済学教授。).

(68) *Ibid.*, p.29.

(69) *Ibid.*, p.10ff. 手頃なヴィーコ選集としては、L.Pompa (ed.), *Vico's Selected Writings* (Cambridge, 1982).

ズは、トマス・アーノルドから次のような部分を引用する。

個々人は、幼年期・若年期・壮年期・老年期という自然の法則に従うが、それぞれの期間には特徴的な表出があり、それは肉体的な活力が熟して思慮の点でも成熟し、ついにはいつしか衰退するというものである。ちょうど春夏秋冬に対応する期間を、不可避な自然法則に沿って通過していくようである。国家の歴史もまた、「自然のなかの期間」から成り、幼年国家から壮年国家へというような発達がみられるのである。<sup>(70)</sup>

ハーディは、カスター・ブリッジでの最初の朝、エリザベス・ジェーンが窓を開ける場面で、こうした段階論を扱うときの手法をほのめかしている：「秋の足音を感じさせる甘い空気が入ってきた」（9章）。活力ある壮年期にいるヘンチャードは、ローマ時代の野獣のように「競技場」に入る（9章）。

自由・国教派によれば、それぞれの段階は独自の「特徴」をもつ。ハーディは、過去の成長諸段階の証拠を残す町としてカスター・ブリッジを表現している。幼年段階では人びとは野蛮、好戦的で自己中心的でもある。これはヴィーコのいう社会発展の「詩的」段階で、理性がまだよく形成されていないため、人びとは想像力をつうじて統治されなければならない。祭司や詩人は、神話をもついて人びとの熱情を従属させる。一人の貧しい男マイケル・ヘンチャードも、「呪術崇拝的」（3章）生活観に支配されており、また他のカスター・ブリッジ市民の多くも、魔術によって天気を的中させる魔法使いの力を半分信じている。幼年段階では、人びとは冷血な貴族によって統治されていたのだが、壮年段階では理性自体が形成され、それとともに社会制度が確立されてくる。商業や科学が、戦争や聖職者支配に代わる生活様式として発達する。法の基礎として、知性が創造力にとって代わり、文明化と洗練が野蛮にとって代わる。これが社会の一生のうちでも活気のある段階であり、国家の中央集権的統制を必要とせずに自発的に成長するときでもある。カスター・ブリッジはなお、その活気ある成長の多くの兆候をみせている。古代ローマ時代の城壁への植樹（4章）や、ルセッタが自己を啓発しているエリザベス・ジェーンに奨める博物館（22章）など、あらゆる事物が安楽と洗練を謳歌する。牛攻めや、夫が犯した殺人罪のためその妻を火刑にするといった、幼年段階の野蛮なゲームは過去のものとなる（11章）。幼年段階はようやく終わり、「非常によい市場町」は統制されない自発性の側面を示す。その「仕組みと乱雑さは、その特異さによって、そしてその合理性において、目を楽しませる」（9章）。張り出し窓、戸口の上がり段、靴の泥落とし、教会の天窓、張り出した角が、舗道に沿った歩行者の通行を妨げた。個人の境界に関しての無拘束を顕著に示すこれらの固定された障害物に加えて、運搬人の荷車が、歩道と車道の間の仕切りを形成する。どの店も、その内容を示すために歩道に向いて位置する。「売り物の馬は列をなしてつながれ、その前足は歩道に、後足は車道におかれ、馬たちはしばしば通学中の少年たちを阻んでしまうことがあつ

注 (70) T.Arnold. *Thucydides*, I, p.615. (Forbes, *op. cit.*, p.21.に引用。).

(71) *Ibid.*, p.33ff.

た」。「控えめに境界線から一步下がった」人々によって形成された奥まった場所は、畜舎として豚飼いに使用された（同章）。

これが、自由・国教派の歴史家の捉えた、古くからの血統よりむしろ金銭をもつ17世紀の貴族によって創造された共同社会である。語り手は、そのなかで最も豪華な邸宅、ハイ・プレイス館について次のようにいふ：「それは完全に貴族的というのではなく、尊大なものではない。それでも古風な訪問者は『血統がそれを建て、富がそれを謳歌している』と直感的に述べている。漠然としてはいるが、その装飾についての彼の意見はそうであるかもしれない」（21章）。

しかし自由・国教派の見解によると、このような成熟段階のあとには衰退と疎外がつづく。金持ちがさらに裕福になるにつれ、自発性にかわって社会の後の段階の不自然な体面が現れてくる。知的活力は、「無力な懷疑主義」と「陰鬱な自意識」へと道を譲る。<sup>(72)</sup> この疎外された状況で、人々は「人生の公平な観察者になるという、空しい欲求」を身につける。共同社会が依拠していた協力的分業は、たんなる専門の職業化へと道を譲る。地方的感覚と自治は、コスマポリタニズムと過度の中央集権によってとて代わられる。<sup>(73)</sup> 市民共同社会は、内部における「衰退」のために、外的である公共の記念碑を保持しえなくなる。<sup>(74)</sup>

ヘンチャード市長下のカスター・ブリッジは、後期壮年期、即ち発展の衰退段階にある共同社会のあらゆる兆候を示している。聖ピーター教会の「灰色がかった」塔が、このことを象徴している（4章）。まだ田園にとり囲まれているかにみえる農村生産者の共同社会は、穀物商人と資本主義的農場主のための特化された市場に変質していた。スコットランド人ドナルド・ファーフレーのみならず、もっと「コスマポリタン」であるルセッタも、都市のエリートは体面がありすぎて、「三人の水夫」で飲み、その真中に迎えいれられることはなくなっていた。ヘンチャードの業務の特別のマネージャーとなったファーフレーが、種蒔き機を導入したことによって、人びとが経験的に種蒔きの寓話を理解する時代は終わりを告げた（24章）。

そのように内部の信頼が失われた社会は、すぐに野蛮に戻ってしまう。宗教の束縛もなく、人びとはホメロス時代の英雄のように荒々しくなる。社会は有産階級と無産階級に両極分解する。市民の不和と政治的派閥争いが起こってくる。

それがカスター・ブリッジの状況であった。ヘンチャードは、「アキレスの教育」を受けた近代の野蛮人であった（12章）。ローマは、市民にパンとサーカスを与えることで統治を維持した。ヘンチャードが市民に与えたのは、ただ禁酒、「道義に基づかないパン」そして偽りの尊厳だけであった。彼は、ヴィーコの描くアキレスのように、「怒りっぽく堅苦しい」、動物や野蛮人のようにいろ

注 (72) *Ibid.*, p.37.

(73) *Ibid.*, p.39.

(74) *Ibid.*, p.38.

(75) *Ibid.*, p.75.

(76) Cf. Pompa, *Vico's Selected Writings*, p.253.

いろ表現されている。組織の統一という外観にもかかわらず、彼のカスター・ブリッジはすでに政治的派閥や階級憎悪によって分断されており、それは最後にはスキミントン行列の無秩序として爆発するのである。

自由・国教派にとって、歴史は行動の指針である。成熟状態にある古代ギリシアやローマの研究も、1830-1848年の近代の革命危機に対処する手掛かりを提供するものだった。歴史は、後期壮年期の社会が、精神的な新生を必要としていることを示した。もし道徳的衰退が、死に至るものでないとすればだが。ペルシア、ギリシア、ローマの三帝国は、ヴィーコのいう歴史の上向きの螺旋における文明の媒介として去來したものであった。いまやヨーロッパ文明は、アレクサンダー大王やシーザーの帝国のように、国内の革命を排除することや異民族を成功裡に支配するべく、挑戦されていた。正しく読めば、プロテスタンント・キリスト教が英國の共同社会に集まって、聖書のダニエル記に予言されているように、第四の帝国の新生のための原則を提供することができる、ということを歴史は示したのだ、ということになる。<sup>(79)</sup>

このように自由・国教派の歴史の考えは、全くエリート主義的であり、正確には英國的な、そして基本的には国教徒的なものであった。彼らは、その良き指導者コルリッジ（彼らにヴィーコを教示した人物）のように、新生は上方からなされなければならないと信じていた。成人教育や博愛事業の計画をつうじて改良されるべき労働者階級の救済・教育プログラムは、「知識人」がリードしなければならない。彼らはまた、植民地支配下にあるさまざまな人びとを、プロテスタンントのキリスト教道徳向上させることができ、「ゲルマン系」あるいは「アーリア系」英國人の義務であると考えた。彼らはアイルランドの自治法のあり方を支持し、過度の中央集権に対抗する地方の自由を擁護した。こうして英國国教会における「自由主義」派として、反動的トーリー主義とオクスフォード偏重主義に対抗する「進歩」の擁護者として、自分たちを表現することができた。また同時に、ジャコバン主義に対する唯一の安全な砦として、健全なキリスト教教義のもとでの「民主主義」の教化を意図していた。

彼らが、人間は全く神の助けなしに自分自身の歴史を創造すると考える20世紀の何人かの論者のようには、ヴィーコの『新しい学』を読んでいなかったことを強調することは重要である。彼らは、「超絶的な神は、彼〔ヴィーコ〕のそのような科学の基礎ではなかった」という見解を受け入れなかつたであろう。彼らにとって、神の導きの手それ自体、歴史の真実であり、それはキリスト教信仰の目をもって史料を読む者には示されるものであった。<sup>(80)</sup>

注 (77) *Ibid.*, p.252.

(78) *Ibid.*, p.48.

(79) *Ibid.*, p.111.

(80) Bergin and Fisch (eds.), *New Science*, p.xxxviif. ヴィーコの歴史哲学をキリスト教信仰から引き離す彼らの試みには、反論もある。Cf. Berlin, *Vico and Herder*, p.81-82.

(81) G.Vico, *The New Science*, introduction by Bergin and Fisch.

『市長』には、文化水準を変えたり、自分自身の歴史を創造する人間の能力については、少しのヒントがあるだけである。<sup>(82)</sup> それに比べ、『テス』では、ハーディは人間によって創造される過程として歴史を表現する自由・国教派の考え方（したがってヴィーコの保守的な読解）を脱構築する。<sup>(83)</sup> テスは、「情動の人」（2章）から、歴史が、大多数の男女にくり返しみりかかる災禍の終わりのない循環である必要はないことを理解する、完全に意識的な人間に成長する。グードが示唆するように、「大地の子」（28章）としての「農民」をみる視点が、ある意味で、下層民にはキリスト教の啓蒙が必要であるというように保守的な理解をする、クレア家のものである、ということは正しい。ハーディはこうした保守的な視点を構築し、読者をその結末に巻き込むのである。読者には、1章の旅行者や30章の暗示的な列車の乗客のように、外側からテスの物語を見ることは許されない。しかし、語り手が田舎の人びとの伝統的な生活様式や素朴な意識を記録している、ということに留意することも重要なことである。ヴィーコの時代の「庶民」<sup>(83)</sup> のように、彼らは前歴史時代的な意識をある部分保持している。彼らは、神話、予言、魔術師の世界（18, 21章）に想像上住んでいる。彼らは「感受性の強い農民」（25章）として、自分自身の感情に合わせて自然を理解している。テスは、ヴィーコにおける原始的な人びとと同様に、空の美しさを崇拜している。彼らと同様にまた、教会の説教によってではなく教会の音楽によって、宗教感情が喚起される。16章で彼女がうたう詩篇の呪術崇拜的な歌詞は、そうしたことの反映である。：「戸外の自然の形態や力を主要な伴侶としている女性たちは、その精神のなかに、後世、女性に教えられたような組織化された宗教よりも、ずっと昔の祖先がもっていたような異教徒的な空想を、はるかに多く保持しているのである。」（16章）

『市長』がそうであったように、『テス』は人間の歴史の過去の段階の痕跡をもっている地域として、「ウェセックス」を表現している。酪農夫クリックは、初期壮年期の自発性のある状態から、後期壮年期の硬直的で計算づくの状態への移行期にいる。

「ヴィーコデイは酪農夫ディック、日曜日にはリチャード・クリック氏」（17章）

彼の妻は、乳搾りをするには気位が高すぎるようになってしまっていた。彼は素朴な古い世界の家長ではなく、「この峡谷の外では滅多にみられない、またその内部でもそう多くはないような優良な乳牛」百頭ほどの巨大な群れをもつ、二つの農場を経営する近代的資本主義的な大規模農場主であった。彼はかつて、刺激臭のあるバターの原料となるミルクが魅力的であると考えていた。しかしいまや近代人の感覚をもつようになって、牧草地のニシニクが牛の乳に影響すると認識し、ロンドンの顧客（22章）に気づかう様子は、あのドナルド・ファーフレーがそうであったように、専門化されかつ職業人化されたものである。

注 (82) Cf. Goode, *Thomas Hardy*, p.93.

(83) Pompa, *Vico's Writings*, p.211.

(84) ここでいう「空想 (fantasy)」は、ヴィーコのイタリア語 “fantasia” (“imagination” を意味する) と対応する。

「ウェセックス」は、自由・国教派の歴史家が、ヴィーコに従って理解した意味での、「後期壯年」段階にある。ハーディは、野蛮状態の再来に対する彼らの恐怖については合意するが、キリスト教の摂理は削りとってしまう。我々は、ハーディが1880年代末の時点で執筆していたことを想起すべきである。彼の読者たちはみな、80年代に再生した階級闘争や古い政党の派閥への分裂を目の当たりにしていた。こうしたことはテスによっても反復され、彼女は大都市の喧騒を峡谷の水にたとえている。

何万人もの喧騒のようですね。市場で集会を開いたり、議論したり、説教したり、口論したり、すすり泣いたり、うめいたり、祈ったり、ののしったりするような（32章）。

「ウェセックス」の共同社会の民衆文化は、集権化された国家によって破壊されてきていた。これは進歩ではない。テスの母親は、「際限なく改定された法令にもとづく国民教育を受け、標準的な知識をもっている」その娘よりも、若い嫁として世間的にずっと賢こかった。（3章）結婚に関して、ハーディの「農民」が原始的であるとすると、彼の描く近代人は野蛮、即ちヴィーコに従えば、彼らは人間の司法以前、宗教以前の行動段階に後退していることになる。ヴィーコは、囚われの身になることとして野蛮な結婚を表現し、原始的な人間たちは、野外で交接したときの天の神の罰を恐れるため、暴力は洞穴の暗闇のなかで起こると考えている。

アレックはテスの不意をついて暗い森に連れこみ、神を冒瀆するような人を辱める狂暴な行動をとる。テスはついに、「洞穴のように暗い」夜に、「アタランターの競争」（58章）において追いつめられる。エンジェルとのこうした愛の隔たりは、一寸の光陰が通る暗い部屋で起きた。アレックの自分の罪に対する後悔は、ヴィーコが周囲の私生児について考えたような原始的な恥辱感にこだまする。そして、そのような状況のもとでの神の怒りへの原始的な恐れと平行して、テスの呪いの念を感じるのだった。

アレックの「野蛮なやり口」（5章）は、彼を近代の「アレクサンダー」に仕立て、5章のスロープ荘でのテスに対する彼の行動は、確かにヴィーコのいう皇帝の「つかの間の寛容」<sup>(85)</sup>を反映したものである。近代社会の過剰に発達した贅沢は、スロープ荘や「英仏海峡の地中海的な別荘地」（55章）であるサンドボーンによって象徴化され、テスはアレックによってそこに連れていかれ二度目の囚われの身となった。

エンジェルとアレックはこのように、野蛮が再来した時代に埋没した支配階級の代表者である。ヴィーコ流にいえば、エンジェルは信仰を失っており、はじめはテスを彼に肉体的な歓びをもたらす「天性の処女の娘」（18章）として、そして後には封建貴族の家系の娘であるテスに彼が新しい系統を接ぐような対象として、偶像化する。アレックについても、再びヴィーコ流にいえば、彼は

---

注 (85) Pompa, *Vico's Writings*, p.109.

(86) *Ibid.*, p.200.

(87) *Ibid.*

肉欲と残忍という人生における恥と、ニヒリズムの横柄との間を旋回して、「真似ごとの野蛮」に埋没しているのである。<sup>(88)</sup>『テス』は、ヴィーコがローマ共和制後期について書いているのと同じように、不信心、偽善、贅沢、我儘、政治派閥への分裂などが横行する英國を表現している。しかしながら、より目立つことは、ハーディがヴィーコの結論から一步踏み出している方法である。ヴィーコにとって、國家は個人と同様に、三つの段階を発達し、死に至る。しかしこの国家の一生の「悲劇的な一貫性」は、「一つの一般的な一貫性」、即ち「諸国家の世界に生命を吹き込む精神の一貫性」に包摶される。<sup>(89)</sup>人間はそれ故、熱情的な動機から行動しているときでさえ、神の摂理の意図を満たしていたのである、その摂理とは、循環が死滅したもの各々を呼び返しながらつづいていくように、秩序だてたのである。歴史は、神の摂理がこれをもたらす三つの道を示した。第一には、アウグストゥスのように最高権力を手にする英雄を発見すること。第二には、衰えた国家を征服し統治する、発展の初期段階にある新しい国家を発見すること。そして第三は、一度は完結した文明を、人間の発達過程を再度はじめることができるような、荒野に戻すこと、というものである。これは、人類は死に絶えるべきであるということが、神の真意ではないためである。むしろその真意は、「正義」の創造において人間をその担い手にすることにある。<sup>(90)</sup>ヴィーコにとって、人間は神の正義のあやつり人形ではないが、彼らは市民社会において正義を創造することには責任がある。正義は、あらゆる人に市民権を認め、全ての人が利己的欲求ではなく「正義の意志」をもつような状態から成立するものであろう。正義の支配とは、アリストテレスの言葉によれば、「熱情なしの意志」である。<sup>(91)</sup>

『テス』には、神の導きの手は含まれていない。エンジェルはテスに自分の無神論の信条を教え、彼女が死刑に直面しているときでさえも、来世のようなものの存在を信じることに同意することはさしひかえる。ハーディは導きの手について、何の信仰も提供しない。その代わり、彼は「市民世界は、確かに人間によって創造された」というヴィーコの意味に注目する。しかしその脱構築は、この示唆よりはもう少し根源的である。というのは、ヴィーコのいう「人間」とは、詩人であれ英雄であれ合理的な実力者であれ、あまり才能のない同胞を市民社会に導くような人間、即ち「賢人」ないし「哲人」を指していた。ハーディは、正義の形成から神の摂理を除去することでヴィーコを脱構築し、<sup>(92)</sup>民衆から一人の女性の知恵によって引き出された循環の神話を構築する。

テスの結末は、循環の七番目の局面を容易に見失う（あるいは抑圧する）、苦痛にみちた光景である。春の日の情景で、エンジェルは両側が「新芽で紫色」に彩られている道に沿ってテスを探している（54章）。教区牧師クレアは、陽の沈む西方をみている。テスは、ついに法によって囚われる

注 (88) *Ibid.*, p.263.

(89) *Ibid.*, par.1098.

(90) *Ibid.*, pp.250-51.

(91)(92) *Ibid.*, p.262.

(93) *Ibid.*, p.198.

身となり、ストンヘンジで夜明けをみていた。アレック殺人のあと、「絶望」の谷底を経験したテスがはい上がりはじめ、エンジェルは彼女と再び結ばれる（57章）。逮捕の前の数時間に、テスは、結婚や家族の法は人間の営みによって再構築されうるのだ、ということに気づくようになる。

「ああ、エンジェル。もし私を失ったら、彼女（ライザ・ルー）と結婚してください。」

「もし君を失えば、僕は全てを失うんだ！それに彼女は、僕の義理の妹だ」

「愛するひとよ、そんなことなんでもないわ。マーロット辺りでは、義理の妹と結婚することは度々あることなんです。」

ジョン・グードが示唆するように、テスは彼女自身の出身地の慣習の名のもとに、死んだ妻の妹との結婚を禁止する英國の法律に挑戦している。自分の子供に洗礼を受けさせたときのように（英國国教会の架空の歴史上初の女性司祭となる）、テスは人びとが自分自身の法を創る、即ち自分自身の歴史を創造することができるということを理解していたが、それらは彼らが好むようではなく、過去から与えられた状況のもとで創造されるものであった。我々が最も明白にテスの建設的役割をみることができるのは、光と暗闇のイメージにおいてである。誤った信念を「暴露し」、「地の果て」で「やって来る昼」の光を通らせるように、昇る陽は黒雲を蹴散らす（58章）。グードが、この陽光を14章の土着的な神と結びつけていることは正しい。テスは目醒め、土着的な国家と宗教の法の犠牲に違いないことを意識する。しかし彼女の扱う犠牲とは、意味をもっている。なぜなら、彼女がストンヘンジ（彼女の母の故郷である）の意味を理解するからであり、また彼女がエンジェルとライザ・ルーに「使徒」を見いだしているからである。

最終章では、循環の効果と、テスの新たな意識の象徴への移行がつづけられている。そこではもう一度、中世と近代が対比されている。即ち「今まで巡礼たちがパンやビールの施しをうける」ホスピスや、「ゴシック建築の風変わりな不規則さという、型にはまったデザイン」といちじるしく対照をなしている監獄などである（59章）。我々は再び、野蛮の再来と、人類が再度精神の上向循環をはじめる巡礼を、想起させられる。テスの「二人の使徒」（50章）、エンジェルとライザ・ルーは、神の「正義」に背を向け、手をたずさえて「眺望が未来へ」広がっているような「起伏のある野原」を進む。

ヴィーコと対比させることによって、貴族の再来には何の希望もないことがわかる。即ち、「ダーバヴィル家の紳士淑女は、なにも知らずに墓に眠っている」のである（59章）。もし新たな宗教となるものがあるとすれば、それは人類の考えることのできる最上のもの（テスがアレックに説いた「親愛の宗教」）を崇拜する、人間主義となるだろう。テスの物語はその象徴であり、彼女の「使徒たち」はその結末で「祈るように」身をかがめる。

『テス』のこうした意味を小さくすることの一つの理由は、「二人の使徒」をおおう理解可能な躊躇であるかもしれない。グードは、エンジェルがテスの経験から何も学んでいないという。つまり彼は、ずっともとのエンジェルのままであるというのである。<sup>(94)</sup> 彼をテスの使徒として、ライザ・ル

ーを「テスをもう少し精神的にしたような人物」として受け入れることは、グードがこの小説が求めていると考える読解、即ちテスの物語を搾取の物語として受け入れることができ、ジェンダーと階級の偏見からそれを自由にすることができるものとして読解することを、否定するようにみえるかもしれない。この読解が求められているとしても、起こったことに対するテス自身の責任について注意する必要があるだろうか。ハーディは彼女の悲劇的な傷について沈黙はしていない。彼女は余りに想像と情熱と夢のなかにひたりすぎ、「当座の小さな達成に満足したり、…かつて力のあったダーバヴィル家がいまそうであるように、重荷を背負った家族によってのみ成し遂げられるような、小さな進歩への骨の折れる努力に対し、心をくだくこと」(16章)はできなかつたのである。「精神化」とは、靈的な存在の意味での魂をここでは意味するとるべきではない。それはむしろ、ヴィーコが彼の時代の「俗流化」を、最初の原始的人間と比較して「精神化」と呼んだ意味で読まれるべきである。即ち、彼らは「いかに數え計算するかを知っている」のである。換言すると、世界を変革しようとする男女は、情熱と理性を結合しなければならない。それはちょうど、「同志愛」が男女間の愛にさらに加える何かであるようなものである。情熱が実際的知恵にとって敵である以外は、ハーディにとって情熱は敵ではない。

『テス』における人間主義の体現を強調することは、人間主義だけがその唯一の意味であるということにはならない。結局、小説は閉鎖性には抵抗するものである。「黒旗」はたなびきつづける(59章)。それは、ヴィーコがたいへん恐れたような、民衆の無政府状態の黒旗ではなく、抑圧の黒旗なのである。ハーディはいかなる勝利も保証しない。しかし我々を挫折させたままにもしないのである。グードが多少あいまいに示唆したように、我々は誰に仕えるかを選べるのである。

## 7. 結論

この事例研究から、何らかの明白な方法論的結論を引き出す時がきた。まずははじめに、歴史家が「実際に生じたこと」を研究する史料として、小説を使用することにためらう必要はないというべきであろう。ハーディの小説は、南西部の農村共同社会の慣習や言いならわしや技術についての観察に満ちている。ハーディがいうように、「ものごとはウェセックスにおけるそれのようである」。<sup>(95)</sup>同時に我々は、英國の過去や、我々自身の時代をみる一つの方法として、彼の小説に特権を与えることはできない。歴史学の方法は独自の創作ルールをもつものであり、それは小説家のルールとは異なる。これは歴史学的方法が、「過去は本当はこうであった」、というような絶対的な真実を創作ものだ、と主張するのではない。歴史家が探求することは、概念と、歴史家の間で知られている全

注 (94) Goode. *Thomas Hardy*, p.131.

(95) "General Preface to the novels and poems, 1912", repr. H.Orell, *Thomas Hardy's Personal Writings*(1967), p.44.

ての史料との、可能なかぎりの適合をはかることである。E. P. トムソンは、「英國民衆のモラル・エコノミー」に関する議論を大胆に進めたが、モラル・エコノミーは、彼自身の表現を使えば、歴史家の「技芸」をもって判断されるべき「歴史学の閑門」の以前に残されたままである。すでにみたように、トムソンにつづく研究は、「道義に基づかないパン」というイデオロギーに関するハーディの観察を反証するものでもないし、トムソンが参照した史料を読んでトムソンの明敏な読み方に反駁するものでもない。しかし後続の研究は、別の史料からより広範な知識を得て、暴動についての別の説明を探すべく我々に求めるものであり、農村史の解釈としてハーディに特權を与えるといいういかなる考えも却下するものであった。文芸批評家は、歴史家同様にこうしたことに留意する必要があろう。

私の二つ目の結論は、ピーター・ラスレットとK. D. M. スネルの文学社会学についてである。もし文芸批評家が、彼らの偏見と一致するような歴史家に近づくという点で時に有罪であるとすれば、これらの歴史家たちも、その表面上の価値で一つの解釈を受け入れているという告発から、逃れるものではない。彼らは、これまでにすすめられてきた言語論やフィクション論の発展を無視している。小説のテクストは、必ずしも単にイデオロギーを反映するものではないし、読者の粗野な欲求に迎合するものでもない。ましてや文化産業の機械的な生産物であることは稀である。そのように考えることは複雑なテクストの「多義的」ないし「異説注釈的」な性格を無視する還元主義的なものである。ハーディの小説を単純な悲観主義やノスタルジーに還元することはできないし、これはそのような方法で読むべきであるとか、ハーディの読者はみな一つの方法で理解している、などと仮定すべきではない。『テス』の第五版の序文は、それ自身、この小説には複数の解釈が成り立つことの証拠となっている。

最後の結論は、慎重になされる必要がある。もし私が、文芸批評家はときに、小説の執筆や批評とは別のディシプリンであるとして、歴史学の方法に余り注意を払わないことがある、ということをいおうとする場合、私は文芸批評の正式な教育を受けていない歴史家として、文芸批評のやれそなことや達成できることについての私の理解が、短絡的であるかもしれないことにも留意しなければならない。もちろん、私は明らかな失敗、二つだけあげれば、故意の誤謬、小説の修辞的性格の無視の罪を犯していないことを望んでいる。私は、これらの小説はたった一つの意味しか生み出すことができないとか、小説で設定された状況についてのハーディの問いかけに対して、一つの答えしか促されないなどといいたいのではない。私がいいたいのは、批評を政治化するということが、新たな問いかけを表明することができる一方で、テクストに明瞭に示されている諸々の意味を抑圧するかもしれない、ということである。もし、「古典的リアリズム」としてテクストを具体化したり、現代の「革命的」実践のためにテクストを強化したりして、特別の歴史的な文脈にテクストを設定する全ての責任を放棄すればする程、そうしたことが起こりがちである。私は、ハーディが自分の小説に挿入した言説の一つが、歴史の本質について長らくつづいてきた議論と重なるものであ

るということを述べてきた。それは、実証主義者や J. S. ミルのようなその批判者たち、そしてマシュー・アーノルドやウォルター・ペイターといった審美的判断至上主義の擁護者たちによって推進されてきたものである。ほとんどの思想史家が認識してこなかったその背後には、ジャンバティスター・ヴィーコの影がひそんでいた。ハーディの時代には、彼を真剣にとりあげる歴史家はほとんどいなかった。しかし、彼が問いかけた疑問は、我々の時代においては、歴史学方法論の中心的論題になっている。すなわち、イデオロギーや物理的状況にたいする人間の営みの範囲、言語の価値観や歴史的証拠としての人造物、小説と歴史学的「知識」との関係などについてである。この過程においてハーディの小説は重要な道標を提供する。彼は歴史のうえでも、そして歴史学のうえでも、重要な存在となっているのである。

(ウォーリック大学歴史学部シニア・レクチャラー)

(訳者：大学院経済学研究科後期博士課程)